

令和 2 年 7 月 10 日現在

機関番号：34319

研究種目：基盤研究(B) (一般)

研究期間：2017～2019

課題番号：17H02305

研究課題名(和文) 服飾からみる近代日本の生成---ハイカラと上品

研究課題名(英文) Japanese Modern Culture---Kimono, Geisha and Westernization

研究代表者

乾 淑子 (INUI, Yoshiko)

京都造形芸術大学・芸術学部・非常勤講師

研究者番号：40183008

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 10,800,000円

研究成果の概要(和文)：本年度は2回の研究報告発表会(2019年4月26日、同6月28日、述べ発表者6名)と、2回の研修会(2019年9月26日、同11月10日、述べ参加者11名)を開催し、年度の後半は報告書の執筆・編集に費やすことになった。

まとまった研究成果としては研究成果報告書「服飾からみる近代日本の生成---ハイカラと上品」を2020年3月1日に上梓し、これには7名の研究者の論文を掲載した。明治を中心として広くは昭和までの日本近代の多様な服飾(衣服、髪型を含む)についてこの論集ではとてもカバー仕切れるものではないが、とりあえずの成果としては、少なくとも、どの論考も全くオリジナルな成果である。

研究成果の学術的意義や社会的意義

2017年度と2018年度に続いて、花柳界文化に関する研修会を実施した。これに関する直接的な成果は研究協力者である田中圭子と小川知子による論文および著書であるが、その他のすべての分担者と協力者にとっても、近代日本の芸術・文芸に頻出するにもかかわらず、その現場を見たこともない花柳界を体験することは、不要不急である基礎研究という営みにおいて実に貴重であった。

また、互いの専門が少しずつ違う研究者が一堂に会する研究発表会の場合は、言うまでもなく互いを補い合う非常に有効なものであった。服飾メジャーではない美術・歴史等の分野では当関に付されてきた服飾を考えることで見えてきた諸相を今後も考察したい。

研究成果の概要(英文)：This year, two research report presentations (on April 26, 2019 and on June 28, 2019 with 6 speakers) and two workshops (on September 26, 2019 and on November 10, 2019 with 11 participants) have been held. I spent the second half of the year writing and editing the report. As a summary of research results, the report "Research on generation of modern Japan through clothing --- HAİKARA style and elegance" was published on March 1, 2020, in which the papers of seven researchers were introduced. It's impossible to cover the wide variety of clothing (including clothes and hairstyles) in Modern Japan, which corresponds mainly to the Meiji era and widely ranges to the Showa era. However, each of discussions is completely original and unique at least.

研究分野：美術史

キーワード：近代日本 着物 洋装 日本髪 女子教育 博覧会 芸者 女流画家

1. 研究開始当初の背景

本研究の目指す方向における研究成果としては、すでに研究計画書で挙げたように多様なものがあるが、国立民族学博物館のスタッフであった大丸弘・高橋晴子の共同による「身装文化」関連の成果群が最も近い。

美術史・文学・歴史等を学ぶに際して必要な近代の服飾(身装)についての知識を、明治・大正期に生まれた研究者たちは生活歴の中で自然に身につけており、それについて云々する必要を感じなかったのであろう。筆者の学生時代には特段に身装について教授されることはなかった。しかし現代に立ち至ってみると、服飾の知識が不足するために起こる誤記・誤解は想像以上に多い。

筆者の経験では1925年くらい以降に生まれた研究者の場合には、すでに幼少時から洋装のみで育ち、特に都市部の裕福な家庭では完全に洋装に移行していたために、自身は全く着物を着ることがなく、しかしまだ和装が溢れていた社会で育ち、日本人なのだから着物は知っていると考えているらしいと想像される。

また服飾は女子供の領分として、正当な研究の範疇から排除される傾向があったことも否めない。服飾を含む旧家政学系の研究分野全般について、研究分野として確立していないと明言する関連研究者も少なくないのである。

2. 研究の目的

既述のような背景の中で、筆者の立てた「服飾からみる近代日本の生成---ハイカラと上品」という問題意識は、近代日本が目指した脱亜入欧・富国強兵が具体的にはどのように現実化されたのかを服飾の観点から探る試みである。サブタイトルとしてあげたハイカラと上品という言葉は、特に中上流社会が目指した志向を表し、現実には国民の多くは下流に属するが、社会が目指す上昇志向の方向性による指標であり、そのような美意識に現れた近代化への志向を探ることを目的とする。

服飾という言葉は、衣服、髪型、履物、持ち物、アクセサリ類などの総称であるが、今回は特に日本髪を中心とした髪のアシライに関する研究を主眼の一つとした。本研究の立ち上げ以前にご縁を得た東京都台東区谷中で発見されたりボン関連資料にインスパイアされた髪型の洋装化もその一環である。また当然、伝統的な日本髪に関する基礎的な知識を得ることにも注力する。

更に日本髪を含む古い風俗を残す花柳界に関しても、現代の私たちは非常に無知であることから、パフォーマンスアートでもある座敷の実態を知るべく、フィールドワークを実施し、これについての最低限の知識の獲得にも務める。その他に、各研究メンバーの従来からの専門性を勘案し、異なるバックグラウンドを持つ者たちの間での知見を活発に交換することも非常に重要と考える。

3. 研究の方法

まず全体研究会と個人研究の発表・講評とに分けて実施する。

全体研究会ではフィールドワークを中心とし、

日本髪については、結髪師にその実際および歴史などについて実演と解説をしていただく。

花柳界研修については東京、京都などのいくつかの座敷でフィールドワークを実施する。

その他、近代の服飾および風俗に関して参考とすべき(洋風建築・欧米に流出した服飾・芸術関連の活動に関するもの)の見学・調査等を行う。

個人研究の発表および講評会は研究期間の後半に実施し、意見交換を行う。

4. 研究成果

(1) 研究の概要

明治から昭和にかけての和装の変化はまず、家の中に引きこもることが階級の証しでもあった上流階級の女性が率先して戸外に出るようになった結果として生じたものが多く、お端折りが常態化することから始まる。さらに「活動的」ということが重要視されるようになると、洋装との折衷案がいくつもの婦人雑誌などに掲載されるようになり、識者による議論も活発となる。中上流の女性たちはお端折りをして戸外に出るようになると同時に、その一部(皇族・華族・官僚の夫人や令嬢)は洋装をも取り入れることが政府から推奨される。

ここで注視すべきことの一つは、衣服と髪型とアクセサリ類の洋装化は必ずしも一体ではなかったということである。完全な洋服を着用することはまだ非常に高価であった明治初期から、靴をはく、パラソルをさす、シャツを着物の下に着る、ショールを羽織るなどの一部だけに洋装を取り入れるようになり、明治18年には衛生的な観点から鬘を簡略化した束髪を普及

させようと「日本婦人束髪会」が結成される。

その結果、油で固めて埃などの汚れを溜めやすく、結髪に時間を要する日本髪をやめ、束髪を結う婦人が徐々に増加する。これは現代の目から見れば、それほど簡略とも思えず、日本髪に近い形であるとも言えるが、当時としてはかなり簡便な形で、特に若い未婚の女性は髪を解き下げて背中に垂らすマーガレットや三つ編みなどを髪飾りで飾るようになった。その際にリボン(幅狭く細長き布などと解説が付される)を用いることなどが束髪会のパンフレット等(冊子状のものゝ錦絵とを合わせると10数種類が現存する)にも描かれ、書かれているが、明治20年前後はまだリボンは高価な輸入品であり、実際には束髪にもカンザシからの派生らしき花飾りを用いることが通常であった。造花と生花の両方が用いられている。

谷中で近年、発見されたフランス・ドイツからの輸入リボンおよび、明治27年頃から日本で製造されるようになったリボン類の膨大なスクラップ帳、遠山記念館、文化服装学園博物館に収蔵される当時のリボンにその実態を見ることができ、また錦絵(安達吟光、楊洲周延などの作品)や小説(二葉亭四迷)や随筆(長谷川時雨、石井研堂など)にも描かれる登場人物たちの花飾りからリボンへの変遷をたどることができる。

和装と洋装とのせめぎ合いは、例えば久保田米僊の幼稚園保母を描いた絵画<園児遊戯図>からも知られる。京都のごく初期の幼稚園を米僊が描いた作例には、洋装でオルガンをはひく保母が登場するが、新聞挿絵、記念写真などの同時代の関西の事例を見ると実際に京都の保母が洋装をしていたとは考えにくい。これは、より上流階級の子供たちを対象とした東京女子高等師範学校付属幼稚園の様子を描いた絵画<幼稚保育図>などに見られる保母の洋装に倣ったものとも言え、啓蒙的な活動が多かった米僊らしい「かくあるべき保母像」ではないだろうか。

明治から大正にかけての洋装の移入時代における洋装をめぐる状況の詳細については、まだまだ不明な点が多山積すると考える他にない。

(2) 調査・研修会・フィールドワークの概要

日本髪については、東京下谷で結髪業を営む「かなすぎ美容室」大庭啓敬氏に実演していただくと共に、古い絵画・写真などの実例に関する解説を依頼した。これは通算で5回に及び、ほとんどの参加者たちにとって初めての経験となった。なお大庭氏の元で毎週、髪を結び直してもらい、日常的に地髪で髷を結って暮らす女性にモデルになっていただいたり、研究会メンバーがカツラを用いて交替してモデルになったりした結果、当然のことながら、誰でも日本髪は似合うことが了解されたが、できあがりには頭の形などによる差がかなりあることも分かり、貴重な経験であった。また日本髪には非常に多くの種類があるが、ある一つの形から別な形への変換が意外に簡単なことを知り、驚いた。

京都の結髪師である「山中美容室」山中恵美子氏にも実演していただく機会を設けた。こちらは主に祇園の芸妓・舞妓の髪およびアクセサリ、芸妓・舞妓に独特な着付け等について学ぶためである。京都の町の特性として、特定のお茶屋との関係が実に緊密であった。

更に横浜の「美容室カーム」渡辺チエ氏は服飾文化研究会を主宰し、日本髪の造詣が深いことはもちろんであるが、膨大な着物コレクションを蔵し、その保存・研究に尽力しておられる。着物文様の意味、着付けの細部などに関する疑問点について、たちどころに回答していただき、毎年開催されている展示研究会は実に見応えがあった。

花柳界研修については東京「穩の座」で4回、大阪「たに川」で1回、京都「河よ志」で1回、札幌「川甚」で1回を開催した。季節によって着用する着物の違い、着付け、踊り、また座敷の趣向に含まれる煎茶、書道、床飾りの見立てなど、遊びとは言いながらも実に多様な世界であることが分かった。東京の同じ座敷で4回も研修ができたのは衣装、音曲、踊り等々に時宜に応じたさまざまな趣向が用意されていたからである。

また大阪と京都の座敷ではカンザシ、櫛、帯留等のコレクションを見学し、街によって異なるバージョンの唄などを体験することができた。また京都には東京以上に多くの結髪師が存在する。詳細は研究会メンバーである田中圭子が本研究期間末(2020年3月)に著した共著『花街と芸妓・舞妓の世界：継がれゆく全国各地の芸と美』を参照していただきたい。

その著書には収容していないが、三都と言われる東京・大阪・京都以外の花柳界の現状を知ろうと計画したのが札幌における研修である。一度消滅し、最近に復活させた座敷ではあったが、会場である料亭は日本花柳界の最盛期の一つである昭和戦後の建築であり、庭や路地、季節や行事毎に相応しい掛軸、屏風、花器などのしつらいも用意され、やはりこの種の企てには日本文化全般に亘る蓄積がものを言うことが納得された。

その他にいくつかの建築、旧前田別邸である鎌倉文学館14、吉屋信子記念館、駒場の前田邸本邸、札幌の旧永山武四郎邸、東京ジャーミー(イスラム教のモスク)、明治記念館などを見学した。これらは日本中に残る数多の近代建築の中ではほんの一部にすぎないが、近代日本が目指した近代化イコール欧米化という観点から洋風建築および和洋折衷建築群を見たのである。イスラム建築以外はすべて和風と洋風の折衷であるが、持ち主家族の生活空間と接客空間とを和風と洋風とに大別するのが近代化初期の仕様であるとすれば、昭和に竣工した前田本邸では

家族の私室も洋風となっており、すでに生活の大きな部分が洋化していたことがうかがえる。吉屋信子の作品群については、少女小説というジャンルへの軽視によって、歴史風俗への影響関係として研究の対象となることが少なかった。しかし実際には作中に描かれた風俗が多く、少女の洋風へのあこがれを誘ったという意味で吉屋は今後、大いに研究されるべきである。さらに研究分担者の一人である塩谷ももによるイスラム宗教服のファッション化と欧米化に関する発表に合わせて、東京ジャーミーを見学した。世界中の民族服が欧米の影響の下で何がしかの変遷を遂げており、和装と洋装の関係を考察する上での外部視点として、今回はイスラム服を参考として取り上げたのである。

フランス・ドイツ・イタリア等に流出した着物や関連資料、および日本に影響を与えた服飾資料などに関する調査については以下の通りである。

まず、吉屋信子の小説中ではなぜかイタリア音楽、芸術が取り上げられることが多い。これについては、イタリアに留学中の音楽史家に明治の日本人の音楽留学などについて調査し、報告書を書いていただいたが、詳細はまだ不明だという他にない。

さらにベネチアのモチェニーゴ服飾博物館、東洋美術館、パリのガリエラ美術館、リヨンの織物装飾芸術美術館等を見学し、またハンブルグ芸術工芸博物館に明治期から大量に保存されている着物・工芸品の調査を実施した。これに関する成果は未だ未発表であり、同行した研究分担者・種田和加子、研究協力者・上杉恵子と協議中である。海外に流出した着物等に関する調査はいくつかあり、それぞれに労作であるが、視点が変わるとまた新たな成果となることが調査によって明らかになった。特にハンブルグ芸術工芸博物館が所蔵する資料に関する調査は非常に興味深く、継続調査の必要を痛感した。リヨンの織物装飾芸術美術館の資料についても日本国内にある資料との異同調査を実施したい。

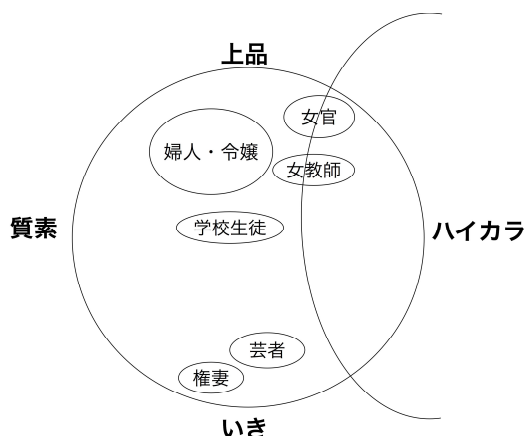
(3) 以下は、2017年度から2019年度に実施した主たる研究発表のタイトルである。

- 近代美術に描かれた花街の女性たち（発表：小川知子）
2017年12月 ジェンダー史学会 / 奈良
- 幕末明治の明清楽---描かれた女性・描いた女性（発表：ハンス・トムセン）
2017年12月 ジェンダー史学会 / 奈良
- 吉屋信子にみるハイカラ（発表：乾淑子） 2018年11月 近代風俗研究会 / 鎌倉
- Tamamos robe: Cosplay and kimono in Australia and Japan（発表：エメラルド・キング）
2019年1月 近代風俗研究会 / 札幌
- 近代錦絵に見る女性風俗欧化の変遷（発表：乾淑子） 2019年1月 近代風俗研究会 / 札幌
- インドネシアにおける服飾の変遷とモダン：ムスリムファッションを中心に
（発表：塩谷もも） 2019年4月 近代風俗研究会 / 東京
- 久保田米儼《園児遊戯図》に見る明治中期の働く女性-保母と女教師（発表：寺田早苗）
2019年4月 近代風俗研究会 / 東京
- 万博における「日本女性」の表象「観光資源」としての女性（発表：山本佐恵）
2019年4月 近代風俗研究会 / 東京
- 野口小蘋のスケッチと着物（発表：山盛弥生） 2019年4月 近代風俗研究会 / 東京
- 近代結髪資料のさまざま（発表：田中圭子） 2019年4月 近代風俗研究会 / 東京
- リボンと花かんざし（発表：乾淑子） 2019年6月 近代風俗研究会 / 東京
- 東京女子高等師範学校資料と久保田米儼（発表：寺田早苗）
2019年6月 近代風俗研究会 / 東京
- 万博における「日本女性」の表象---国家が宣伝する女性像（発表：山本佐恵）
2019年6月 近代風俗研究会 / 東京
- 戦争柄着物とメディア・ジェンダー（発表：乾淑子）
2019年9月 20世紀メディア研究会 / 東京

(4) 研究の方向性について

研究計画書に右図のように記載した「ハイカラと上品」というサブタイトルの視点については、本研究期間中に形にすることができなかった。国家の政策である脱亜入欧の視覚化として称揚されたり、揶揄の対象とされたりした「ハイカラ」の概念は、神は細部に宿るという意味においてはリボンの研究などによって実現されたとも言えるが、より大きな視点で捉え直す必要がある。

また「上品」は、花柳界によって代表される「粋」の対立概念であり（九鬼周造『いき



の構造』) 言うまでもなく素人の野暮に通じる。このような感覚は昭和初期までの日本人には通底するものとして共有されていたが、着物文化の衰退に連れて、そのような通念も徐々にぼやけてしまった。このように変化しつつある日本の美意識について、服飾という切り口で考察を続ける予定である。

基本的には、計画書に示した図で表した仮説に何ら変更はなく、そこで示した和の割合が減じ、洋の割合が増したのが近代化の歴史的事実である。しかし、その意味するところは微妙に変化しつつある。

例えば、テレビドラマ「スタートレック」の描く未来で人々が身につけているのは、伸縮性に富んだ生地を用いて体の線を露わにした体操着のような衣服で、誰もがその同じような服を着ていることが未来の科学的合理性を表象するらしい。一方で映画「スターウォーズ」のキャラクターたちは、日本風や中国風のゆったりとしたガウンや柔道着のような衣類を用い、時には装飾的で大仰な髪型で登場する。そこに見えるのは過剰な装飾性、多様な民族性に富んだ未来世界である。

果たして実際の未来がどのような形を選択するのかはわからないが、1966年に始まった「スタートレック」と、1977年に封切られた「スターウォーズ」との間には、ローマクラブによって1972年に発表された「成長の限界」がある。このままでは未来はやってこないかもしれない、というのが「成長の限界」の指し示すところでありながら、現実の私たちは何ら有効な対策を取ることなく、愚かしいエネルギーの濫費と争奪を続けて来ている。もし生き残れるとしたら、人類が選ぶ方向性は近代化を突き詰めることなのか、または別の道を探るのか、という逡巡が、インドネシアの人々がイスラム宗教服を選択することの急増や、パリやミラノのハイファッションにおけるエスニック志向なのかもしれないのである。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計21件（うち査読付論文 4件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 0件）

1. 著者名 乾淑子	4. 巻 74
2. 論文標題 近代日本の結髪・花柳界・着物	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 北海道女性研究者の会通信	6. 最初と最後の頁 15,18
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 乾淑子	4. 巻 19
2. 論文標題 着物意匠のメッセージ---男の教養としての忠臣蔵	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 インテリジェンス	6. 最初と最後の頁 170,182
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 乾淑子	4. 巻 32
2. 論文標題 博物館と美術館	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 民族芸術	6. 最初と最後の頁 156,157
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 田中圭子	4. 巻 493号
2. 論文標題 岡本神草《口紅》の官能美	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 視る 京都国立近代美術館ニュース	6. 最初と最後の頁 2,5
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 塩谷もも	4. 巻 2
2. 論文標題 国際交流科目を通じた異文化理解とは---『アジア文化交流』から考える	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 人間と文化	6. 最初と最後の頁 178,189
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 THOMSEN, Hans	4. 巻 1
2. 論文標題 A Collection of Early Ukiyoe Master	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 University of Zurich East Asian Art Section, Journal of Research Projects	6. 最初と最後の頁 1,10
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 THOMSEN, Hans	4. 巻 1
2. 論文標題 Der japanische Garten	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 Die Modellwelten von Matthias Zimmermann	6. 最初と最後の頁 164,203
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 種田和加子	4. 巻 54
2. 論文標題 明治初期金工作品への謡曲の絵画的応用	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 藤女子大学文学部紀要	6. 最初と最後の頁 99, 115
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 小勝禮子	4. 巻 1
2. 論文標題 日本の女性美術家たちー活動と評価の歴史	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 科研報告書 特集：谷口富美枝研究ー論文・資料集	6. 最初と最後の頁 59,66
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 乾淑子	4. 巻 34
2. 論文標題 ベネチアビエンナーレ 2017---純粹芸術は社会にコミットしないという日本的常識	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 民族芸術	6. 最初と最後の頁 172,173
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 乾淑子	4. 巻 40
2. 論文標題 越境する面白柄---男の教養・芸者の粋	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 美術フォーラム21 特集「装飾の潜在力」	6. 最初と最後の頁 100,107
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 乾淑子	4. 巻 36
2. 論文標題 再現展示	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 民族芸術	6. 最初と最後の頁 232,234
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 乾淑子	4. 巻 -
2. 論文標題 梗概に代えて	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 科研報告書「服飾から見る近代日本の生成---ハイカラと上品」	6. 最初と最後の頁 59,61
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 山盛弥生	4. 巻 -
2. 論文標題 野口小蘋・小恵の帯---女性文人画家の明治・大正	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 科研報告書「服飾から見る近代日本の生成---ハイカラと上品」	6. 最初と最後の頁 50,58
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 寺田早苗	4. 巻 -
2. 論文標題 久保田米億《園児遊戯図》について---同時代資料との比較	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 科研報告書「服飾から見る近代日本の生成---ハイカラと上品」	6. 最初と最後の頁 33,49
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 青山友子	4. 巻 -
2. 論文標題 きもの・短歌・おどり---1937年の鶴見和子	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 科研報告書「服飾から見る近代日本の生成---ハイカラと上品」	6. 最初と最後の頁 25,32
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 田中圭子	4. 巻 -
2. 論文標題 東西芸妓のよそおい今昔	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 科研報告書「服飾から見る近代日本の生成---ハイカラと上品」	6. 最初と最後の頁 18,24
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 小川知子	4. 巻 -
2. 論文標題 描かれた花街---近代美術と女性イメージ	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 科研報告書「服飾から見る近代日本の生成---ハイカラと上品」	6. 最初と最後の頁 10,17
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 山本佐恵	4. 巻 -
2. 論文標題 明治期の万国博覧会における「日本女性」の表象---「ゲイシャ」から「貴婦人」まで	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 科研報告書「服飾から見る近代日本の生成---ハイカラと上品」	6. 最初と最後の頁 9,16
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 乾淑子	4. 巻 -
2. 論文標題 ハイカラと日本髪---日本女性の近代化	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 科研報告書「服飾から見る近代日本の生成---ハイカラと上品」	6. 最初と最後の頁 1,8
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 寺田早苗	4. 巻 10
2. 論文標題 明治の働く女性「保母」の絵画的イメージ---久保田米僊《園児遊戯図》《唐子遊び図》の位置付け	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 東京都江戸東京博物館紀要	6. 最初と最後の頁 81,104
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計20件 (うち招待講演 5件 / うち国際学会 10件)

1. 発表者名 乾淑子
2. 発表標題 吉屋信子にみるハイカラ
3. 学会等名 近代風俗研究会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 田中圭子
2. 発表標題 「呼び名でたどる日本髪の世界」全4回
3. 学会等名 NHKラジオ第二『私の日本語辞典』(2018年4月放送)(招待講演)
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 KING, Emerald
2. 発表標題 Connecting Australia and Japan
3. 学会等名 Australian National Museum presented by ANU (招待講演) (国際学会)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 KING, Emerald
2. 発表標題 Tamamo 's robe: cosplay and kimono in Australia and Japan
3. 学会等名 近代風俗研究会 (国際学会)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 寺田早苗
2. 発表標題 久保田米儂《園児遊戯図》に見る明治中期の働く女性-保母と女教師
3. 学会等名 近代風俗研究会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 山本佐恵
2. 発表標題 万博における「日本女性」の表象；観光資源”としての女性
3. 学会等名 近代風俗研究会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 塩谷もも
2. 発表標題 インドネシアにおけるムスリムファッションに関する人類学的研究
3. 学会等名 トランスカルチャー状況下における顔身体学の構築第二回領域会議 (国際学会)
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 種田和加子
2. 発表標題 「小公女」の変遷---若松賤子から伊藤整まで
3. 学会等名 藤女子大学日本語日本文学会
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 小川知子
2. 発表標題 近代美術に描かれた花街の女性たち
3. 学会等名 ジェンダー史学会
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 ハンス・トムセン
2. 発表標題 幕末明治の明清楽---描かれた女性・描いた女性
3. 学会等名 ジェンダー史学会（国際学会）
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 塩谷もも
2. 発表標題 インドネシアのムスリムファッションの現状
3. 学会等名 鳥根県立大学公開講座
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 小川知子
2. 発表標題 跡見花蹊～女性教育に尽力した大阪ゆかりの女性画家
3. 学会等名 適塾講座「近世・近代の大阪と女性」
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 TANEDA, Wakako
2. 発表標題 Transformation of "Queer " Little princess "
3. 学会等名 The 15th EAJIS International Conference Universidate NOVA in Lisbon (国際学会)
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 KING, Emerald
2. 発表標題 Beautifile Violence---Love, Romance and Betrayal in shojo adaption of The Tale of Genji
3. 学会等名 Wemen in Asia (国際学会)
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 KING, Emerald
2. 発表標題 Translotion and Transporting Cosplay Costumes Across Texts, Cultures, and Dimensions
3. 学会等名 Asia Institute Tasmania Public Lectures (国際学会)
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 KING, Emerald
2. 発表標題 Affective Fantasy of Mukokuseki in Puella Magi Magica Madoka
3. 学会等名 Conference at University of Wollongong (国際学会)
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 乾淑子
2. 発表標題 戦争柄着物とジェンダー
3. 学会等名 20世紀メディア研究会(招待講演)(国際学会)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 小勝禮子
2. 発表標題 小沢栄子の生きた時代---近代女性美術家の創生期・戦前から戦後
3. 学会等名 西宮市大谷記念美術館講演会(招待講演)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 青山友子
2. 発表標題 Older women as the Source of Empowering Humour in Contemporary Japanese Culture
3. 学会等名 豪州日本研究会(国際学会)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 乾淑子
2. 発表標題 服飾から見る近代化
3. 学会等名 北海道女性研究者の会（招待講演）
4. 発表年 2019年

〔図書〕 計7件

1. 著者名 KING, Emerald	4. 発行年 2019年
2. 出版社 Palgrave Macmillan	5. 総ページ数 390
3. 書名 Shojo Across Media: Multidisciplinary Approaches	

1. 著者名 THOMSEN, Hans	4. 発行年 2018年
2. 出版社 Michael Imhof Verlag	5. 総ページ数 208
3. 書名 Japanische Holzschnitte aus der Sammlung Ernst Grosse	

1. 著者名 SHIOYA, Momo (eds. TOKORO Ikuya and TOMIZAWA Hisao)	4. 発行年 2017年
2. 出版社 Research Institute for Languages and Cultures of Asia and Africa	5. 総ページ数 298
3. 書名 Islam and Cultural Diversity in Southeast Asia	

1. 著者名 KING, Emerald (eds.FARMEI, Lorna Piatti and BRAIN, Donna Lee)	4. 発行年 2018年
2. 出版社 Routledge	5. 総ページ数 283
3. 書名 Companion to Literature and Food	

1. 著者名 KING, Emerald (ed. JACKSON Anna)	4. 発行年 2017年
2. 出版社 Routledge	5. 総ページ数 322
3. 書名 New Directions in Gothic children's Literature	

1. 著者名 AOYAMA, Tomoko (eds OKANO, Kaori and SUGIMOTO, Yoshi)	4. 発行年 2017年
2. 出版社 Routledge	5. 総ページ数 388
3. 書名 Rethinking Japanese Studies	

1. 著者名 田中圭子、松田有紀子、山本真沙子、片山詩音	4. 発行年 2020年
2. 出版社 誠文堂新光社	5. 総ページ数 271
3. 書名 花街と芸妓・舞妓の世界	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究分担者	小勝 禮子 (KOKATSU Reiko) (80370865)	京都造形芸術大学・芸術学部・非常勤講師 (34319)	
研究分担者	種田 和加子 (TANEDA Wakako) (90171868)	藤女子大学・文学部・教授 (30105)	
研究分担者	日比野 利信 (HIBINO Toshihiko) (90372234)	北九州市立自然史・歴史博物館・歴史課・学芸員 (87101)	
研究分担者	塩谷 もも (SHIOYA Momo) (90456244)	島根県立大学・人間文化学部・准教授 (25201)	